

イノセント・センス ウェイストランド

日進月歩の科学技術とは裏腹に、犯罪や汚職が蔓延り格差は広がり、世界は後退する。極悪企業や犯罪組織がのさばり政府が市民を監視して通信を検閲し、賄賂が公権力を腐敗させ司法は機能せず、自救行為が容認され、自警団による私刑が罷り通る。法律は脆弱性だらけで悪人が得をし善人が損をする。優秀な人間ほど早々に世界を変えることを諦めて搾取る側に回り、未来を担う子供たちさえ、それが合理的だと考えている。未来は現在よりも、現在は過去よりも進歩しているという幻想は、もはや抱けない。

この末期的な時代において確かな実力と善の心を兼ね備え、悪の誘惑に負けることなく正道を歩む聖人君子のような人物は、皆無に等しかった。だが、この街にはそんな存在がひとりいる。

眠らない街、ロサンゼルス。行き交う群衆の頭上でホログラムのピエロが不気味な笑みを浮かべている。レーシング・ドローンが群を成して現れて、レーザーで空中に敷かれたサーキットを通過すると、建物の屋上で待ち構えていた観衆が一斉にシャッターを切る。横断歩道に溢れた歩行者に阻まれ、交差点で立ち往生するタクシーやトラックの運転席は無人で、AIがヒューリスティックに巡回セールスマン問題を解いて最短経路を導出し、緊急時の手動運転のため——あるいは人間の安心のため——設けることが義務付けられたハンドルを操作している。自律動作する六脚のロボット、ヘキサポッドの一眼の焦点距離がきびきびと変わり、深夜でも常にパトロールを行っている。

そんな摩天楼の歩道を厚底のスニーカーで堂々と歩く少女がいた。黒とマゼンタを基調としたカジジュアルなストリート・ファッションはロサンゼルスの夜景によく似合う。彼女自身踏ん付けてしまいそうなほど長くてウェーブのかかった、軽やかでさらさらふわふわの栗色の髪が両手を伸ばしたくらい左右に広がっていて、彼女の一拳手一投足に合わせて舞い上がり、まるで重さというものを感ぜさせない。華奢で小柄で童顔でかわいらしく、明るいシルバー・グレーの瞳がきらきら輝いている。最新型のウェアラブル・デバイスを手でアクリルな印象のウェリントン・フレームの眼鏡が特徴的だ。年の頃は一五、外見こそ幼く見え

るが、一点の曇りもなく自信に満ちた表情としっかりと地についた足取りが、ひとりの人間として自立した強い意志の力を感じさせる。

少女の名前はミナガワ・テェリ。一五歳という若さでスタンフォード大学に在学する、大学院生の才女だ。

「ホットドッグをひとつください」

路上に停車するフードトラックの前で足を止め、テェリは注文する。

「トッピングは如何致しましょう」

注文を確認したのは移動販売車に乗っている、弱いAIで動くクック・ボットだ。

このロボットは自然言語処理を搭載していて多言語での注文に対応し、流暢な合成音声で簡単な案内もしてくれる。多種多様な料理をレシピに従って調理するロボット・アームも備えており、調理器具を正しく使うために画像処理でそれらを認識する必要があるし、材料を取りに行くため悪路走破性が高い移動能力もある。現代技術の粋を集めたロボットだが、それでも商品の販売に関わらない会話はほぼできないし、ましてチェスやポーカールといったゲームもできないければ、フォース橋がテーマのソネットを紡ぐこともできない。

それが現代技術の限界だが、多くの人々は、その事実をネガティブに捉えてはいない。そのような弱いAIでも有意義なタスクを自動化できるのだ。

テーリはクック・ボットの質問に答えた。

「チーズ、バター、アズキ・ビーン・ペースト」

「ありがとうございます。お代は一二ドル八〇セントです」

「アイリスで」

テーリはスマートカードのインカメラで虹彩を撮影しウォレットのロックを解除する。スマートカードの機種はメインストリームではないが、ガジェットマニアにはたまらないタロットだ。タロットのアプリケーションはアルカナと呼ばれ、アイリスはタロットにも対応しているウォレット。古典的だが信頼性の高いパスワードと生体認証を組み合わせた多要素認証で管理されており、決済のたびにロックされる。

それでまさに支払いが完了した瞬間、深々とニューズボーイ・キャップを被った少年が彼女にぶつかった。かれはそのまま歩行者の波にまぎれあつという間に見えなくなる。

スマートカードは、彼女の手から消えていた。

クック・ボットに、このような状況を認識する機能はない。それは簡単な謝辞の言葉とともに、彼女にアズキドッグを渡すのみだった。

「毎度ありがとうございます。またのご来店をお待ちしております」

彼女はスマートカードを盗まれたというのに落ち着いてアズキドッグを頬張っている。

（ロックされているから大丈夫。タロットにはハードウェアレベルの暗号化も生体認証もあるから、すぐには使われない。それに……）

彼女は両腕のブレスレットを起動した。ホロイオだ。空中にマゼンタ単色のホログラムでロサンゼルス の立体地図が表示され、このあたりにいる歩行者の人数とほぼ同じ数の点 が、かれらの動きに合わせて移動している。彼女が軽く空中でジェスチャすると、それらの点のひとつが発光と点滅で強調される。それは盗まれたタロットの位置情報だった。

（時速一〇マイル。走ってる。なかなか速い）

彼女はその点へ向かう最短距離を検索しナビゲーションを設定する。ホログラムが変形し、彼女の目前に三角錐のガイドを表示した。

彼女は慌てず目的地を確認すると、二秒でアズキドッグを平らげ走り出した。なお、彼女のホットドッグ早食い競争の自己ベストはもっと速い。

時速一九マイル。ナビゲーションに彼女の移動速度が表示される。この速度の全力疾走をすると常人なら一〇秒でへとへとになってしまいが、彼女は三〇秒走っても、息ひとつ切らしていない。彼女はもっと速く走れるが、呼吸を安定させて走るのはこの速度が限界だ。それは彼女の基礎体力の高さを表していた。

彼女のふわふわの髪が風に靡く。このあたりの公道の制限速度は二五マイルで、下手な

自転車なら追い越せ、制限速度を守っている車両にも追いつく勢いだ。そんなスピードで歩道を走れば、注目を集めないわけがない。

そして走ることおよそ五〇〇ヤード。あのニュースボーイ・キャップを深く被った少年が目に入る。

BEEP！ BEEP！ BEEP！

警告音！ テーリがジェスチャし、盗まれたタロットが鳴動したのだ！

CRAASH！

彼女はそのまま少年を後ろから抱き着くように押し倒し関節を固める！

少年はうつぶせに倒れたまま左腕を垂直に立てて固定され、人体の構造の深い理解から来るテーリの巧妙な関節技に、痛みこそないもののまったく動けずにいた。

驚いたのは少年だけでなく、その一風変わった光景は周囲の観衆の注目を集めていた。

「なにすんだよ！」

「とぼけないで。ぼくのタロット、盗んだでしょ？」

「人違いだ！」

「人違いじゃないよ。タロットの位置情報と警告音でわかるんだから。これが証拠」

彼女のジェスチャでホログラムに反論の余地がない明確な証拠が映される。

「わ、わかった。降参する。まずは離してくれ」

テーリは半信半疑だったものの、私人逮捕の実力行使には限度がある。現行犯とはいえ白旗をあげている相手に技をかけ続けられれば彼女の行為に正当性がなくなる。

それに少年の年齢はテーリよりもさらに若く、一三歳くらいにしか見えなかった。
(こんな年齢で盗みをするなんて、なにか事情があるのかもしれない)

そう彼女は感じた。

だから、彼女は離れた。

瞬間少年は飛び出して逃走。

「ばかめ！ 返すわけねーだろ！」

テーリはため息をついた。

(案の定だね。まあ、また捕まえればいいけど)

彼女が再び走って追いかけると、意外な展開が起こった。

少年が群衆のひとりに、殴られて道に尻餅をついたのだ。

「ひ……」

思い切り顔を殴られた少年は鼻血を出し、恐怖に震えている。

殴った人物は二〇歳前後の大学生に見える青年で、良い体格をしている。

「おまえ、あの子からなにか盗んだんだった？ それはいけないなあ」

背中を見せ這いつくばって逃げようとする盗人の少年。青年はかれを捕まえ、仰向けにさせて馬乗りになると、顔をかばうだけで抵抗の兆候もない少年の顔を何度も殴る。少年の歯が一本抜けて道に転がった。

「盗んだものを返せ！」

「返す、返すから」

すぐにぞろぞろと青年の仲間が現れ、なにかを示し合わせ不敵に笑った。かれらは男女合わせて一〇人前後の同年代の大学生のグループで、いわゆる自警団の一派だ。かれらは殴る、蹴るなどして少年を痛めつけた。

「た、助け……」

少年は涙を流して助けを求めた。

テーリはその言葉でもう我慢ならなくなった。

「やめて！ たしかにかれは盗みを犯したのかもしれないけど、明らかに過剰だよ！」

テーリの言葉を聞くとかれらは私刑を中止し、リーダー格らしき青年が現れて、彼女にスマートカードを見せた。

「あの少年はきみからこれを盗んだ。おれたちはそれを取り返し罰を与えた。代行手数料は

三〇〇ドルでいいよ」

「……最低」

「なぜ？ 悪いのは罪を犯したあいつだ。平和には正義が必要なんだ」

「きみたちの行為は正義じゃない。法に依らない私的制裁は単なる暴行だ」

ふと視界の端にふたり組の警官が見えたが、自警団のひとりがかれらに賄賂を握らせると見て見ぬふりをして去ってしまふ。野次馬たちに至っては助けに入るでも通報するでも無視するでもなく現場の写真や映像をスマートカードで撮影して笑っている。

テーリはその光景が許せなかった。

（最低、最低、最っ低！）

賄賂を受け取ったのはふたり組の警官のひとりだけだった。もうひとりとは新米でその行為に疑問を感じていたが、汚職警官の上司に逆らえなかった。

「私はいくらを助けるべきだと思います」

現場からすこし離れたところに停車する警察車両の車内で、新米の警官が疑問を呈す。賄賂を受け取った汚職警官は純粹な若者を叱咤した。

「ばかが！ 通報もないのにそんなことしてなんになる。給料は雀の涙、いくら人間として正しいと思うことをしたって、たった一度でもミスを犯し、誤認逮捕なんてした日には人

生を棒に振っちまうんだぞ。ちょっとは頭を使って考えろ！ この腐った世の中ではな、これが唯一合理的な立ち回りなんだよ！ 事件を見る奴らが太勢いるのに、だれも通報しないのが良い証拠だ。だれひとり助けなんて望んでないんだよ！ おめえもこのことはだれにも言うなよな。チクったら停職だ」

若者の警官は血が流れんばかりに歯ぎしりし、拳を握りしめていた。

一方青年はテーリに彼女のスマートカードを見せつけ、言った。

「返して欲しくないのか？」

正義感の強い勇敢な少女は、軽く頭ふたつ分は身長が高い青年をきつと睨み付けた。

「そんなことはどうでもいい。きみたちは暴行の現行犯だ。ぼくがこの場で逮捕する」

「おまえは警官か？ 逮捕権はあるのか？」

「私人逮捕を知らないの？ 現行犯なら警官じゃなくても逮捕できるんだよ」

「自警団がやっていることも同じだ」

「違う。私的制裁と私人逮捕の区別もつかないようじゃ、話にならないね」

リーダー格の青年が舌打ちして指を弾くと、窃盗犯の少年を痛めつけていたとりまきがぞろぞろと集まり、テーリの前に立ちはだかった。

「こっちは一〇人。おまえはひとり。勝負は見えると思うけど？」

「全員まとめてかかっておいでよ。無駄だと思うから」

自警団のうち三人が痺れを切らしバットやナイフを振り上げ、彼女に襲いかかった。

しかしなにが起きたかジャグリングの玉みたいに自警団の少年少女が宙を舞い、しかしダメージは一切なく、ふわりと地面に着地した。

一瞬の出来事になにが起きたかわからず今度は五人合わせて攻撃に移るが結果は同じ。全員まるで高跳びでもしているかのようにテーリの頭上を通過した。

「なに遊んでる！ 相手はひとり、それも子供だぞ！」

「で、でもなにが起こっているのかわからない、攻撃が当たらないんです！」

「もういい、おれがやる！」

青年は仲間からバットを取り上げ勢いよく振り被り、彼女の脳天目掛けて振り下ろす！

——センス！

あまりのスピードで常人の目には捉えられない。だが彼女のセンスは○・二秒、人間の反応の限界速度の領域において、世界をスローモーションで、物理量が分布する三次元のグリッドとして認識していた。

彼女はバットから逃げるのではなくむしろ積極的に懐に迫ってゆき、続いてかれの手首に添えるように指を這わせて、支点とした。そしてかれの足首を軽くつま先で小突くと、か

れが攻撃に転じてやや前のめりになった重心の変化を含め、すべての力が手首を中心に作用し、人間の直観に反した一回転を披露する！

不可能なことが起きたように思えるがすべては古典力学で説明可能だ。科学はしばしば人間の直観に反した結論を導く。彼女は人体の構造の力学的作用を完璧に理解しており、数式に忠実な運動をする技能と基礎体力があるため、このような芸当が可能なのだ。

それらはすべて訓練で会得した彼女の不断の努力の賜物だったが、彼女でさえ他者には説明不能な水準に昇華されており、あえて言葉で表現するならと彼女はこう呼んでいた。

——センス。

投げ飛ばされた青年は反対側にふわりと着地し、なにが起きたかわからず混乱する。

テーリはその隙に九一一に電話をかけていた。

《状況を説明してください》

「ロサンゼルスで暴行事件が発生しています」

《どこで起きていますか？》

「このデバイスの位置情報を参照してください」

《確認しました。そこへ警察を送ります》

警察無線でさきほど賄賂を受け取ったふたり組の警官にもその通報が共有される。

「通報がありましたよ、行きましょう」

若い警官が提案するが、上司はそれを拒否する。

「まぬけ！ 今更行ってどうする。知らぬ存ぜぬを貫けばいいんだ」

すると若い警官はドアを開けて車を降り、怒鳴った。

「私はひとりでも行きますよ！」

するとそれに気圧された上司は目を丸くする。走って現場に向かうかれの背中を見て、かれは吐き捨てるように言った。

「ぼかが。そんな正義感が報われる時代じゃないってことに、早く気付け」

一方テーリの華麗な手捌きに、自警団は軽くあしらわれていた。すでに全員が乱戦状態だったが、彼女の技の前にかれらは彼女に触れることもできなかった。

「むだだってまだわからない？」

息を切らせて立つこともままならない自警団たちに対し、彼女は疲れのひとつも感じていない様子だ。技のみならず基礎体力でも大きな差があり、格の違いは歴然としていた。また自警団たちの疲労はかれら自身の攻撃動作によるもので、彼女はかれらを安全に着地させ、彼女がかれらに与えたダメージはまったくない。

自警団はすでに勝てないと悟っていたが、相手の攻撃で負けるならともかく、ここまで

してみずから負けを認めたり逃げることはプライドが許さなかった。

「それほどの実力があるのに、なぜおれたちを攻撃しない」

「目には目をで、盲目になりたくないから。警察が到着するまで、ぼくはきみたちをここから逃がさない。でも裁きたいわけじゃないし、ぼくにはその権利もない」

「ばかにしてるのか！」

「そんなことないよ。でもそう感じたのなら、ごめん」

「なぜ謝る。おれたちを悪だと思っているんじゃないのか？」

「相手がだれであれ——善い人間だろうと悪い人間だろうと——ぼくはリスペクトを欠く言動をとりたくはない」

その言葉が自警団たちに物理的にも精神的にも敗北を喫したことを自覚させ、窃盗犯の少年にも反省のきもちを促した。

「……おれたちが戦うのを諦めて逃げたらどうする」

「捕まえる。そのために必要とされる最小限の実力行使をもってね」

そんなところにやっとうと警察車両がいくつも現れ、自警団を包囲した。

若い警官がかれらに宣告する。

「さきほどここで暴行事件が発生しているとの通報があった。状況から見て容疑者は明白

だ。きみたちを現行犯逮捕する」

自警団たちはすでに敗北を自覚していたので、それ以上抵抗することなく捕まった。負傷した窃盗犯の少年はそれで安心し、乱戦でいつの間にか地面に落ちていたタロットを拾い、テーリに返そうとした。

「あの、ごめんなさい……これ、返します」

「ありがとう。でも、きみも悪いことをした。そのことはちゃんと償うんだよ」

「……はい、ごめんなさい」

「ぼくに謝ってもしようがない。ぼくが訴えなくても罪は罪。次のきみの相手は検察だ。反省してるみたいだから、きっと大丈夫だよ！」

こうして自警団は暴行、少年は窃盗の容疑でそれぞれ捕まった。テーリの活躍はそこにいた野次馬たちにより世界中でニュースになった。自警団の供述により警察関係者が賄賂を受け取っていたことも明らかに、収賄罪に問われることとなった。

テーリは事件の証人としてかれらの裁判にも出席した。彼女はどちらの肩を持つこともなく、ただ真実を話した。

自警団の裁判が終わったとき法廷で、若い警官が彼女にたずねた。

「あなたはなぜ少年を助けたのですか」

「ふしぎなことを聞きますね。ぼくは物を盗まれて、戦うしかありませんでした」

「取り返すことが目的なら、あなたなら簡単にできたでしょう。ただ取り返すだけでなく少年を助けた。なぜそうしたのかが知りたいのです」

「さあ。あまり深く考えたことはありません。目の前で殴られ蹴られ助けを求めるひとがいれば助けようとするのは、当たり前前行動だと思えますけど」

「そんな当たり前の行動を当たり前にとれる人物が現代では珍しいのです」

「たしかにそうですね。ぼくはすこし出しゃばりすぎなのかもしれません」

「そんなことはありません。ただ……あなたを突き動かす信念が知りたいのです」

「信念というほど大仰なものじゃありませんよ。ただ、助けを求めるひとがいるなら助けになっただけです。それだけです」